



シュタンツェル大使（中央）、
メルケル大統領の写真を背景に

学生訪問記 世界に触れる

連載⑤

フォルカー・シュタンツェル

日本国駐劄 ドイツ連邦共和国特命全權大使

〔聞き手〕

獨協大学・同大学院

勝又紀英／橋本 仁／松野下涼／石川駿輝

日独の未来、 それは若者の想像力にかかっている

日独交流二五〇周年を迎えた二〇一二年。
東日本大震災からの復興に取り組み日本と、
欧州債務危機の回避に奔走するドイツ。
難局に立ち向かう日独両国の役割と
将来について、大使に伺った。

日本への関心のきっかけは反核デモ

雨足が激しい二月某日の夕暮れ。獨協大学の学部生、大学院生四名と『外交』編集部で、ドイツ大使館に向かった。広尾駅から有栖川宮記念公園沿いに坂道を上っていくと、今回の訪問地ドイツ大使館がある。館内は吹き抜け構造となっており、そこにそびえ立つ巨大なクリスマスツリーに感嘆の声をあげながら、私たちは大使の執務室へ案内された。

執務室に入ると、朗らかに握手で歓迎してくださったフォルカー・シュタンツェル大使。まず私たちが驚いたのは、大使の流暢な日本語だ。それもそのはず、大使は大学時代に京都大学へ三年間留学された経験の持ち主であった。そこでまず、シュタンツェル

ル大使が日本に興味を持ったきっかけについて伺った。

一九四八年、フランクフルト近郊のクロンベルクに生まれたシユタンツェル大使は、家族や学校の先生の影響を受け、一〇歳のころから政治に興味を持ち始めた。当時欧米で盛んに行われていた数万人規模の反核デモに積極的に参加し、反核デモが起る背景を探るなかで、広島・長崎の被爆を知ったという。それをきっかけに日本に関心を持ち始め、フランクフルト大学では、日本学、中国学、政治学を専攻した。当時は日本語と中国語の資料読解が課せられていたという。

一九七二年、シユタンツェル大使は京都大学へ留学した。日本では八人で共同の下宿生活を送った。学問に精を出す一方で、毎日午後四時半から合気道部での稽古に励み、稽古後は先輩や友人たちと飲みに行き、また麻雀をして学生時代を謳歌したという。

ソフトパワーは計画できない

私たちが所属する獨協太学は、一八八三年に西周によって設立された獨逸学協会学校を起源とし、伝統的にドイツとの学術交流を担ってきた歴史がある。二〇二二年二月、第三回獨協インターナショナル・フォーラム「日独交流の歴史から未来を見据えて―社会学問文化―」が本学で行われた際にも、シユタンツェル大使をお招きして「日本とドイツの学術交流」と題する基調講

演をしていた。大使は講演の中で、「日独交流の歴史において、学術交流が日独両国の関係に与えた影響は大きく、未来においても学術交流は重要な意味を持つ」と語られた。

そこで、私たちはシユタンツェル大使に次の質問を投げかけてみた。パブリック・ディプロマシーとしての学術交流や文化交流を構想する際、政府はどのような戦略をとることが有効であるか。シユタンツェル大使は以下のように答へられた。

「ソフトパワーを政府が計画して作り出すことはできません。実際、日本のアニメやマンガはドイツをはじめとする欧州でもたいへん人気ですが、それは日本政府が計画して生まれたものではないでしょう。そもそも、ある国の文化が外国を惹きつけるのはその国の文化が外国に新しい想像力をもたらしてくれるからです。それは日本であれドイツであれ、政府が計画して外国に植え付けるものではない。政府ができることといえば、自国の文化を自国で『創造』できる環境を整えることくらいで、その後の伝播は自然の流れに委ねておけばよいのです。」

なるほど、私たちは外交という仕事のレパートリーに対して過度な期待を寄せすぎていた。続いて、ドイツ文化の魅力について伺ったところ、「やはり文学ですね。二〇〇九年にルーマニア出身のドイツ語作家、ヘルタ・ミューラー氏がノーベル文学賞を受賞したことからもわかるように、ドイツ文学には力があります。も



Volker Stanzel

1948年生まれ。68年よりフランクフルト大学で日本学、中国学、政治学を専攻する。72～75年京都大学に留学。79年ドイツ連邦共和国外務省入省の後、80年ケルン大学にて博士号を取得する(哲学)。駐日大使館勤務(82～85年)、駐中国大使、外務省政務総局長などを経て、2009年12月から現職。

ちろん言語のバリアはありますが、優れた翻訳を通じて容易に外国へ打つて出ることが出来ます」。

それから急いでこう付け加えられた。「もちろん食文化も外せませんね。隣のフランスも競争相手だけど、フランスにはソーセージもなければ、ビールもないしね。まあ、ワインはそこそこあるけど」。一同爆笑。閣下、ドイツワインもフランスに負けていませんよ！食文化にまでフランスへのライバル意識が及ぶとは、さすがはドイツの外交官である。

3・11 そのときドイツ大使館は

東日本大震災後、ドイツから日本に六〇〇〇万ユーロの寄付が送られたほか、多くの支援と励ましをいただいた。日独両国はよ

り強固な絆で結ばれたと思う。

翻つて震災発生時、ドイツ大使館はおよそ六〇〇〇人の在日ドイツ人に対してどのような支援を行ったのだろうか。「まずは、被災地にいるドイツ人の安否を確認することが最優先です。震災発生から二時間は電話がまったく通じませんでしたが、インターネットが徐々に回復してきました。ドイツ大使館はおよそ三〇〇〇人の在日ドイツ人のメールアドレスを把握しています。その中から被災地にいるドイツ人のメールアドレスをリストアップして連絡をしたり、仙台にあるドイツ名誉領事事務所と連携して、安否の確認にあたりました。ドイツ本国からもさまざまな問い合わせが殺到して大変でしたが、総じて万全の態勢で対処できたと思います」。

脱原発のドイツに対し、日本は…

福島第一原発の事故を受け、ドイツでは二〇一二年までに原発の全廃を決定した。日本でも脱原発の機運が高まり、浜岡原発の運転が全面停止になるなど、日本もエネルギー政策の岐路に立たされている。日本の原発政策や環境保護の取り組みについてどう見ているか、質問してみた。

「日本に赴任した三〇年前に比べると、日本政府の環境保護に対する取り組みは格段に改善しています。省エネも進みまし

た。

ドイツの政策転換については、「ドイツでは、脱原発運動と環境保護運動は同意義です。なぜなら原発の廃棄物を最終処分できる施設はスウェーデンを除いて世界のどこにもないので、すから」と正面から指摘した。また、再生エネルギーについては、「ドイツは確かに再生可能エネルギーの先進国ですが、地理的な条件が異なれば、具体的な方法も変わってきます。ドイツは風力発電が盛んですが、日本は地熱発電に大きな可能性があります。日本は日本に合った独自の再生エネルギー普及のあり方を考えるべきでしょう」と助言された。

日中関係は、独仏関係を自指すべきか

二〇二二年、中国はGDPで日本を抜き、世界第二位の経済大国となった。これを受け、欧州連合（EU）がアジア外交の軸足を日本から中国へシフトするのでは、という懸念について、シユタンツェル大使は「日本は今なおアジアで最も豊かな国であり、中国よりもはるかに政治的かつ経済的に安定した国です。ドイツの企業は市場の規模だけで貿易相手を選ばない。技術開発で先駆的な存在である日本企業は大切なパートナーだ」と答えられた。

続いての質問。ドイツはかつて周辺諸国と領土問題を多く抱えていた。豊富な資源を有するアルプス・ローヌ地域をめぐるフ

ランスとの争いは特に有名である。この争いに終止符を打ったのが、一九五二年の欧州石炭鉄鋼共同体（ECCSC）の発足だ。今日のEUの礎である。資源の共同管理を梃子にした独仏関係改善の成功例を、現在の日中関係に生かすことはできないだろうか。これに対する大使の答えは率直だった。「難しいと思います。日本と中国では国家の規模が違いすぎますし、政治制度も異なります。そもそもECCSCが発足できたのも、民主主義という制度を共有できていたからです。もちろん、将来の日本と中国の外交官、そして国民の想像力にかかっている問題ではありますが」。

日独の将来は、君たちがつくる

最後に、日独関係の将来を明るくするためには何が必要かと伺ったところ、シユタンツェル大使は笑顔で答えた。「日独両国の若い世代がお互いに関心を持ち、もつと交流を深めることから始めましょう。将来をつくるのは、私ではなくあなたたちです。個人的には、日独両国の歴史や伝統、クラシック音楽などの古典芸術に関心を持つ若者が増えることを願っています」。

最後の言葉は、大使からの私たちへのエールと受け取った。取材を終え、おもむろに鞆から教科書を取り出す筆者。まずは本業のドイツ語に、活を入れ直そうと思つ。■